

「鬼」

吉城組 西念寺 三島 見らん

とうに忘れていたようなことが、折に触れることで思い出され「あれはそういう事だったのか」と、合点がいった経験はありませんか？まるで、推理小説のように、点と点が結ばれていくような感覚に似ているのかもしれない。そのような経験を一つ紹介したい。

私は小さい頃から怖いものに目がなく、ホラー映画や怪談好きは今でも続いている。はなからエンタメだと思っているから、恐怖のどん底に墮とされることはまず無い。そのような私でも肝っ玉が縮み上がった経験が一度ある。それは小学生の時に見た『地獄絵図（※飛騨古川・林昌寺蔵）』だ。怖かったが、一つ一つの場面を 食いるようにして、目を凝らして見入っていた自分がいた。鬼のその形相はどれを見ても 笑っているように見え、情け無用の責め苦を受けている 罪人の悲鳴が 今にも聞こえてくるようだった。鬼に「お前が死んだ後、ここで待っているからな」と言われた気がして 怖くなり、踵を返して逃げるようにして帰った。全身がすくむ経験はあれが最初で最後だった。

あれから時が経ち、仏教を学ぶ中でふと気がついたのは、「真宗の僧侶は地獄の話をしてはいけない」ということだった。些細なことだが、深層心理にどうしても地獄へ行きたくなという想いが働き、その事に目を向けさせたのかもしれない。その気づきを境に「地獄」が気になり、もう一度絵を見るため約15年振りに『地獄絵図』のある場所に向かった。しかし予想に反し、あの頃を感じた恐怖は全く消えて失せてしまっていた。私の中で地獄もエンタメ化してしまっていたのだろうと思って、なんだか薄寂しい思いになった。久しぶりに対面した絵をゆっくり眺めていると、ある場面にさしかかった際、陰鬱な気分になった。「賽の河原」である。

ここは地獄の中で唯一平穏な場所ではあるが、鬼の行いを穏やかな気持ちで見る事が出来なかった。ご存知だと思うが、ここは親より早く死ぬと此処へ送られる。絵の中の子ども達は

三途の川辺にある石を積み上げている。鬼は血生臭い事はしないものの、その積み上げた石を棍棒で突いたり蹴ったりして壊すのだ。これが永遠に繰り返される。小さい頃には何とも思わなかったが、当時私は親となっていたこともあって、なんだか納得いかないものを抱えながら、家路に着いた。さて「早死の罪」とは、何だろうか？

図らずもその意味が明らかになったのは、ある在家出身の修練生との出遇いがあった。彼は縁あって北海道のあるお寺で法務を手伝う中、ある日住職から枕経を頼まれた事があった。事情を聞くと子供が亡くなったということを知り、とても自分にはつとまらないという理由で即座に断ったそうだ。その時、住職からこう言われたのだという。「お前は、人生の良し悪しを寿命の長さで見ているだろう。一歳で亡くなろうと、百歳で亡くなろうと、一人のかけがえのない一生涯であることを忘れるな」と、一喝された話をしてくれた。住職のその言葉を耳にした途端、「そうか！賽の河原の鬼は私たちの姿なのだ」と判り、思わず膝を打った。

積み上げられた 石の数は「亡き子の年齢」を表していたのだ。私たちは積み石に見向きもせず、「不幸な子ども」と決めつける事は、鬼が石積みを壊す事と同じで事ではないだろうか。子が精一杯積み上げた石を、何故一緒になって喜んで褒めてあげられないのか、という声が聞こえてくるようだった。罪は子にあるのではなく、私たちのあり方にあったのだ。この体験から「地獄」を創り出しているのは 私なのだということを、長い歳月をかけて 教えられたような気がした。今回は地獄のほんの一部分を紹介したに過ぎない。この先もまた、「地獄」から多くのことを教えられていくことになるだろう。なにしろ「地獄」はまだまだ広いのだから。